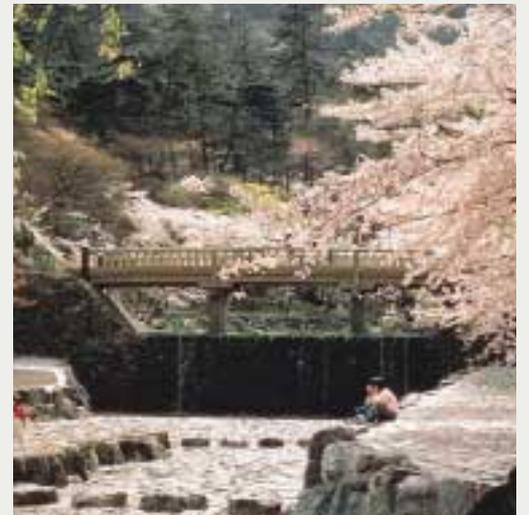
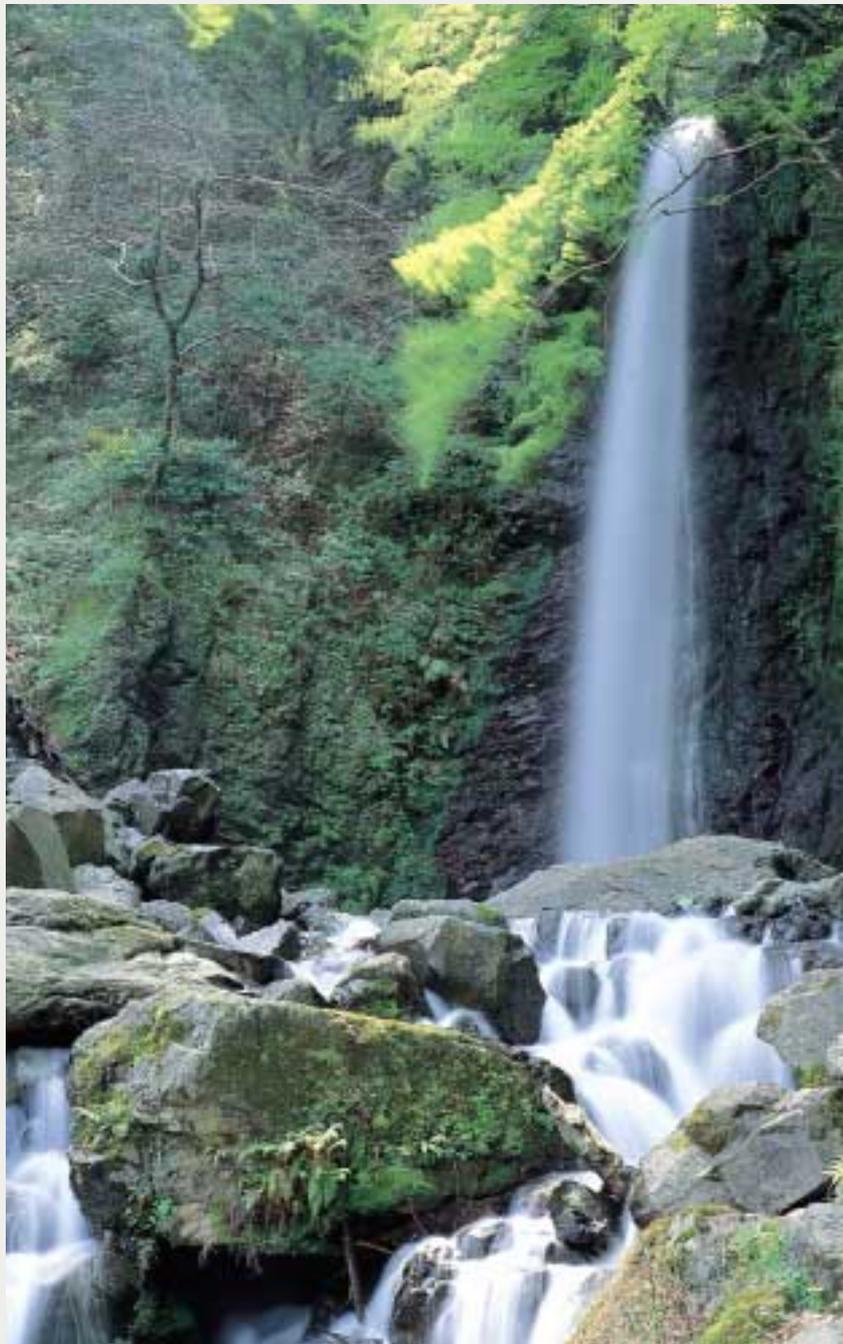


木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思ひます。
春号は養老の山並みに抱かれた養老町から、治水事業の歴史を中心にご紹介します。
伊勢湾台風シリ - ズ第二編では、被災の実態を特集します。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記(養老町)

豊かな自然と文化、歴史が集う養老町

AREA REPORT

牧田川改修事業、その歴史と道のり

気ままにJOURNEY

時代から次代へ。語り継がれる養老ストーリー

歴史ドキュメント

被害者一二〇万人。深い傷跡を残した伊勢湾台風の被害

TALK&TALK

警戒の最前線で

民話の小箱

釜段のさいかちさん

豊かな自然と文化 歴史が集う養老町



近世の輪中の発展 新田の開発

m. 揖斐関ヶ原養老園定公園や東海自然歩道にも指定されるなど美しい自然景観に恵まれ、中でも養老の滝は歴史的な名勝の地として全国にその名を馳せています。

恵まれた立地環境も養老町の特徴の一つ。岐阜県下第二の人口規模を持つ大垣の近隣であることからその結びつきは深く、不破郡の垂井町・安八郡の輪之内町・海津郡の平田町・海津町、南濃町・養老郡の上石津町及び三重県の北勢町と接しています。

しています。狗奴国とは魏志倭人伝に記述された国名で三世紀の倭の中の一国とされ、北の邪馬台国と対立し男王が支配、位置は肥後、伊予など諸説がありますが、東海地方には三世紀ころに一大政治勢力があり、それが狗奴国だという学説が最近注目されています。宇野教授によると、三世紀ころに築造された前方後方墳については、愛知県から岐阜県にかけての濃尾地方が起源とする見方があると指摘したが、これまでもあまり注目されなかった濃尾地方が古来史上重要な鍵を握る地域であるかもしれません。



発掘現場で鏡や鉄剣などの副葬品を見る考古学ファン＝養老町橋爪の象鼻山で

● 日本武尊と多芸郡

養老町一帯のかつての地名は多芸郡。この地名については「古事記」景行天皇の条に日本武尊が伊吹山からの帰途、当地に至り「我が足当芸道平なりぬ」といったことから「たぎ」野と呼ぶようになったと伝えられています。タギタギンとは舌と舌としか歩めない状態。日本武尊はよほど長旅に疲れていたのでしょう。以来、このタギシが変化して、この付近を当芸野、郡の名を多芸郡と呼ぶようになった。

日本武尊が伊吹山を平定して伊勢へ下られた頃から伊勢街道が開け、大和朝廷が全国を統一した律令時代になると、物部氏の一族多芸氏が部民を従えてこの地に移住し、高い文化を植えつけました。さらに、地制、税制、戸籍などを整理、古代の区画法である条里の制を設けて大坪、小坪などの地名を残しています。

● 狗奴国論争に湧く象鼻山古墳

標高約四百mの南宮山から養老山地にかけての東山麓に象鼻山古墳群、別所古墳群、室原古墳群、桜井古墳群、勢圭古墳群など多数の古墳群が点在しています。中でも、象鼻山古墳一号古墳は日本最古級といわれる前方後方墳です。平成九年八月二八日、養老町教育委員会は養老町橋爪の象鼻山一号古墳から二世紀後半の中国後漢の時代をつくられた青銅製の鏡一面が出土したと発表されています。発掘調査を担当した富山大学の宇野隆夫教授（考古学）は「同古墳が三世紀後半のもので鏡などの出土から、邪馬台国と対立した狗奴国の王墓のものである可能性が濃くなった」と

● 養老町の地形

岐阜県の南西部、濃尾平野の西端に位置する養老町は、急峻な山麓部と平野部という二つの顔をもつ地域です。町の地形は海拔〇mの水場地域から養老山地の扇状地につながり、扇状地の最西端からは切り立った岩盤の養老山地の山々が峰を連ねています。

山麓を流れる河川は、牧田川をはじめ杭瀬川、相川、泥川、色目川、小畑川、五日市川、金草川、五三川、津屋川の諸川が揖斐川に合流し、平野を潤しています。この平野部のほとんどは、海拔〇mに近い輪中地域で、これまでも幾度となく水害に見舞われ、特に昭和三四年八月の集中豪雨、九月の伊勢湾台風による洪水は、大きな水害をもたらしました。

養老山地は濃尾平野と牧田川地溝帯にはさまれた紡錘形をした山塊で高度は六百〜八百



養老町の航空写真

● 養老の孝子説話

「親孝行の橋が谷の水を瓢箪に汲んで持ち帰り、老父に飲ます」とこの上もない良い酒だいたいそう喜んだ。養老の滝の孝子説話はあまりにも有名な物語です。

「続日本紀」によれば、霊龜二年（七一七）元正天皇は養老の醴泉に行幸し、その素晴らしい美泉に感動し、年号を「養老」と改元しています。というのも、天皇自ら美泉をすくって洗ったところ、皮膚はなめらかになり、また、この霊泉を飲浴した人々は白髪も黒くなり目の悪い人は見えるようになるなど、どんな病気にも効能を発揮、病が致命傷となるこの時代、澄んだ水は健康の源泉となったのでしよう。元正天皇は改元をはじめ、郡領以下四〇人に位を与え、八〇歳以上の老人に授階や恩寵を行い、天下の孝子節婦を表彰したといわれています。

聖武天皇も天平二年（七四〇）に養老の醴泉に行幸。大伴東人・家持が随従し、養老美泉を詠んだ和歌が万葉集に残されています。

なお、養老醴泉にまつわる孝子説話は建長四年（一二五二）につくられた「十訓抄」を初見とし、「古今著聞集」その他にも取り上げられており、謡曲「養老」では雄略天皇の御世のこととして語られています。

● 源頼朝と頼綱源五

やがて時代は下り平安時代。この地には多芸荘が成立、建久二年（一一九二）には、鎌倉幕府を樹立した源頼朝が多芸荘の半分を頼綱源五に与えた。平治物語は伝えています。これによれば、頼綱源五は源頼朝の恩人、平治の乱に破れたものの平清盛の母、池の神尼に命を救われた頼朝が出家を決意した時、それを押し止めたのが源五だったのです。この恩賞が多芸荘。その後、この地は織田信長による焼き打ちや関ヶ原の合戦などの戦乱に巻き込まれ、水害にもしばしば見舞われましたが、天下泰平の江戸時代を迎えると、幕府直轄領、尾張藩領、大垣藩領などに編入されました。

● 新田開発と多芸輪中の成立

江戸初期になると幕府をはじめ各大名たちは新田開発に力を注ぐようになり、美濃國の大垣藩士戸田氏鉄も治水や利水事業を鑑みた新田開発政策を積極的に実施、というのも氏鉄は前任地の尼ヶ崎領において河川改修や低湿地の排水などに功績を残しており、大垣藩主に着任するとすぐに大垣から伊尾川（現在の揖斐川）に通ずる水路が洪水の原因になることをみてとり、伊尾川との合流点に閘門を築造し逆流を防ぎました。

氏鉄は卓越した治水の見識と経験により、あらゆる手段を使って開墾を奨励しました。養老町一帯でも有尾新田、橋屋新田、大場新田、根古地新田、大牧新田などが開発されました。

低湿地帯での新田開発はその必然的な事として周囲を囲む堤防が築造され、牧田川、伊尾川、相川、杭瀬川などの大堤防が補強されて、牧田川南部の下笠輪中、根古地輪中、有尾輪中、それらをも含む多芸輪中という複合輪中も形成されました。

多芸輪中の形成は寛文二〇年（一七二〇）ころ。金草川、牧田川、伊尾川、津屋川に囲まれた濃尾平野でも最も大きな輪中の一つでした。この輪中には幕府領大垣藩領、尾張藩領、高須藩領などが交錯し、元文三年（一七三三）には二ヶヶ村、一万五千石あまりの輪中に発展していました。

● 全国的物資が集散する濃州三湊

この多芸輪中でも、上流部の用水取得と下流部の内水排除は大きな課題でした。つまり上流部では眼前に河川が流れながらも用水取得は困難であり、下流部では上流からの排水が作物に悪影響を及ぼすなど、同一輪中内でも、利害が対立することから、紛争を引き起こすこともしばしばでした。

そこで多芸輪中でも下流部への排水被害を減少するため、掘抜井戸の制限などの協定を細部にわたって結び株井戸制度が明治初年まで続けられました。

全国的物資が集散する濃州三湊、濃州三湊とは、近世初期、牧田川沿いに開



広瀬橋埋

● 水害を乗り越えて

藩政遺が実施された明治時代。この地方は今尾県、笠松県、犬山県、大垣県、名古屋など所に所屬、さまざまな変遷を経た後、昭和三〇年には現在の町域が確定しています。

近代化を進めた明治以後も水害は依然として繰り返され、明治四年、同九年、昭和二年、同四年の大規模水害に中小の水害も加える、十数回に及んでいます。

また、明治四年の濃尾震災は未曾有の大被害をもたらし、昭和九年の東海地震、同二一年の南海地震でも地盤が弱い低湿地では、大きな被害を受けています。

こうした被害から暮らしを守るため、人々は多芸輪中水害予防組合、喜多輪中水害予防組合を組織



金草川排水機場

して堤防護岸、樋管閘門の水防活動に尽力し、国は牧田川改修工事を実施しました。

この改修工事は平行し、井堰の建設を実施、牧田川に広瀬橋堰と分水樋門を建設して、干害の続いた養老地区、日吉地区への給水を開始、江戸時代から続いた水論争は、ようやく解決したのがこの時。

その一方、低湿地帯では大正二年、蒸気タービン式排水機の設置をはじめとして、現在では二〇か所に排水機が設置され、二毛作が可能となりました。

また、昭和三四年八月の集中豪雨、同年九月の伊勢湾台風の大災害を契機に農業構造の改善を進められ、従来の水稲農業を一新、養鶏、果樹、園芸など多角的農業が発達しました。

現在では、西暦二〇〇〇年を目標年次とした「養老町第三次総合計画―スマイル・プラン」を策定、「笑顔あふれる躍動都市・養老」をめざして、多彩なプロジェクトが実施されています。

- 参考文献
- 『養老町史』通史編上・下巻養老町発行
 - 『のひゆく養老町』
 - 『養老町教育委員会発行 郷土の治水・養老町』
 - 『養老町教育委員会発行 養老町教育委員会発行 町制四〇周年記念 一〇四養老町要覧「養老」』
 - 『養老町発行 養老今昔物語』養老町発行
 - 『岐阜県地名大辞典』角川書店発行

牧田川改修事業、その歴史と道のり

牧田川は、暴れ川と呼ばれたほど、毎年のように水害を引き起こした河川。江戸時代には、宝曆治水や長州藩御手伝普請など、大規模な治水事業が実施されました。昭和三四年には集中豪雨と伊勢湾台風が二度直撃。多芸輪中は泥海と化しました。その後、懸命の復旧活動や水防活動を実施。現在も安全で快適な郷土を目指して河川改修事業が行われています。



昭和34年8月の集中豪雨の復旧工事

牧田川の概要



牧田川（下流）



牧田川横堤と土砂溜（中流）

牧田川は揖斐川の支川。鈴鹿山脈を源流に、養老郡上石津町一之瀬橋までの約二・二kmが上流域で、川幅は一五mから三〇mと広くなりますが、普段は川に水がななく上流の上下津町や関ヶ原町で大雨が降れば急激に水高は増え、水害をもちます。牧田川が暴れ川と呼ばれるのもこのゆえから。土砂の堆積も多く川底は平野面より高く大井川となつています。その後、鳥江から船附を経て養老町太巻の東側で揖斐川と合流しますが、ここまでの七kmが下流域です。上流から押し流された土砂が堆積し、川幅はいっそう広くなって蛇行しています。下流域の鳥江・高洲付近では牧田川に杭瀬川が合流さらに金草川・小畑川も合流する箇所でありながら狭削部となつていました。このため室町時代の終わり頃から自然堤防と自然堤防との間をつなぐようにして人工の堤防を築き、川の流れを固定して洪水の害を防ぐようになりました。

この時代は大雨が降って洪水になっても、至る所に遊水池（洪水の水が蓄えられて一度に大水が出るのを防ぐ地域）があったため、連年のように繰り返される大雨でも、よほど大水でない限り大きな水害は起きませんでした。しかし、江戸時代に入り新田開発が進んで輪中が形成されるようになると、当時の低い堤防では洪水を防ぐことができなくなり、しばしば水害を被るようになりました。こうした水害から人命や財産を守るため、この地ではいくとも治水事業が実施されました。

江戸時代の主な治水事業

《宝曆治水》
宝曆治水は薩摩藩による御手伝普請です。下流域で網の目のように乱流し洪水を繰り返す木曾三川の抜本的改修を目指し、宝曆四年（一七五四）、薩摩藩家老平田勘負を総奉行に事業は実施されました。

平田勘負の本小屋となったのが養老町大牧村の鬼頭兵内宅です。御手伝普請は辰船堀に及び、養老町では当初、鳥江・高洲の狭削部の拡張工事が主力工事の一つとして計画されました。しかし、関係輪中の意見が調整できなかつたことから工事断念。多芸輪中の小坪新田・高柳新田の伊尾川（現在の揖斐川）、津屋川沿いの堤防で補強工事が行われました。

宝曆五年、工事は竣工しましたが平田勘負は八〇余名の藩士を失い巨額の藩費を費やした責任をとり同年五月、本小屋で自刃しています。



薩摩藩士役館跡

養老町の根古地と浄土三昧には犠牲者二四人が埋葬され、天照寺には三人の墓と二十七人の位牌が安置されています。

《長州藩御手伝普請》
薩摩藩による御手伝普請は近世史上最大級

から水が引いたのは九月二〇日でした。復旧状況
昭和三四年
八月二日／堤防決壊
八月二四日／決壊拡大防止、仮締切用資材収集、上流側に中聖年一基沈設
八月二五日／仮締切着工、中聖年及び猪ノ子沈設、浚渫船で土砂堆積、土運搬、土俵積
八月三〇日／水切完了、天端一五m土俵積
九月二〇日／仮締切完了、天端通行開始、引き続き復旧事業実施
九月二七日／伊勢湾台風で再び決壊



避難小屋（大巻の堤防上）

伊勢湾台風が接近した九月一五日には、前線の降雨により揖斐川流域では〇〇～五〇mmの雨が降り、台風が上陸した二六日一八時頃より暴風を伴う雨が降り始め、揖斐川及び根尾川の上流域では二～三時にかけて二時間に七〇～九〇mm、一八時から台風の通り過ぎ去った三時の五時間に一七〇～二三〇mmの雨量を記録しました。



水没した家屋

このため牧田川の出水は同年八月の集中豪雨による出水を上回るものとなり、牧田川鳥江では計画高水位を三〇cmも上回るほど。必死の水防活動にも関わらず、八月二三日に決壊した根古地地先の牧田川堤防の、仮締切箇所が再び延長一四〇mにわたって決壊、多芸輪中は三四日間にわたって湛水しました。この仮締切堤防は従来の堤防より堅固な仮



益田喜次郎肖像（山口県立図書館蔵）

の工事でしたが、それでも水害を根絶することはできず、なおの改修事業を必要としていました。特に、明和二年（一七六五）には五度も洪水があり、大水害が発生しています。この養老町でも、牧田川の堤防が決壊し大きな被害を被りました。

その復旧工事のため、幕府は翌三年、長州藩と支藩岩国藩に「濃州・勢州御普請御手伝」を命じました。命を受けた長州藩では総奉行は益田喜次郎の指揮のもと、総執四七三名の工事に着手。普請場所は約千箇所、総延長は一八〇kmにも及び、養老町では島田村をはじめ一七か村で普請が行われました。

この御手伝普請も薩摩藩士の工事と同じように多数の長州藩士が直接働かない工事に当たりましたが、その苦勞は想像を超えるもの。また、工事費以外にも長州藩士の滞在費などの経費はかさみ、藩の財政は逼迫することになりました。

こうした御手伝普請は外様大名の弱体化を図ることも目的に実施されましたが、その後実施された御手伝普請から、大名は工事費の割当てだけのお金の供出に改められました。

昭和三四年の集中豪雨と伊勢湾台風
江戸時代の大規模な治水事業によってもこの地方の水害は軽減することはなく、明治一九年七月と九月に二度にわたる大水害に見舞われました。その窮状は想像を絶するほどの規模でした。

この洪水の後、揖斐川の出水が牧田川や津屋川へ、牧田川の出水が小畑川へ、それぞれ逆流し被害を大きくしないよう、明治時代には木曾三川分流工事（明治改修）、木曾川上流改修（大正改修）や支派川の改修工事が実施されました。

参考文献
『養老町史』通史編上・下巻養老町発行
『郷土の治水―養老町―』養老町教育委員会発行
『毎日新聞』一九九〇九月二〇日掲載記事より

《治水の恩人、佐竹直次郎》

佐竹直次郎は牧田川改修工事に貢献した治水功労者です。明治四年郡上郡和良村に生まれ、幼少の折、養老町高田の佐竹嘉七の養子となり、岐阜中学へ進学後、家業に従事、その利発さと行動力は近隣でも定評でした。高田町会議員や県議会議員、県議会議長を経て、昭和三年には衆議院議員に。私利私欲を離れた地方産業開発や治水に全人生を傾けました。特に牧田川改修では多芸輪中、喜多輪中の人々とともに、牧田川下流改修促進会を結成し、政府及び県当局に働きかけて、大正一〇年から実施された木曾川上流改修並びに牧田川支流川改修の着手に大いに貢献しています。

昭和二年、直次郎は七五歳で生涯を閉じていますが、その遺志は受け継がれ牧田川改修工事は継続、昭和五年牧田川、杭瀬川分流工事は竣工しました。高田橋のたもとには氏を偲ぶ「治水有言」の記念碑が建立され、毎年九月一日には偉大な功績を称えて顕彰祭が行われています。



佐竹直次郎翁之碑

AREA REPORT



決壊後の復旧工事



避難風景

養老町の工事としては、牧田川の合流点を下げて流水をよくするための導水堤工事を実施しています。工事はその後も大正、昭和へと引き継がれて、現在でも各河川で改修工事は続けられています。

時代から次代へ。語り継がれる養老ストーリー。

苔むした岩肌から、白砂のようにこぼれ落ちるかぐわしき伝説の水。梢に揺れる木もれ日は、甘く、谷川を染め上げる。少女のように頬を染める桜の蕾は、爛漫の時を予感しているのだから。霞たなびく春空に、淡い稜線を浮かべる山波は、時という旅人を、静かに見守っている。



心のテーマパーク 養老天命反転地

● 甘美な香り漂う養老の滝 ●

JR大垣駅で近鉄養老線に乗り換えて約10分。瓦葺きのレトロな駅をでると、霞がかかった空の下、一言金次郎に似た親孝行息子の石像と大瓢箪が迎えてくれました。養老町といえば、孝子伝説で知られる町。奈良時代の親孝行息子のお話は、時代を越えて今もなお、では、孝子説話を紹介いたしますよ。

むかし、山あいの村に、樵の親が暮らしていました。早くに妻をなくし、男手一つで息子を育てあげた父親は、たいそう働き者でしたが、寄る年波には勝てず、床につく日が多くなっていました。そんな父親の楽しみは、息子を相手に飲む酒しかし、たきばは思つうに売れず、酒どころか、二人が食べる米さえ事欠く始末です。そこで、思ひ出したものか、

息子は考え「何をしながら歩くうち、見たこともない滝の前に立っていました。」「しまった、道をまちがえたようだ。」急ぎ帰ろうとして振り向いたとたん、岩に生えた苔に足をすべらせ、谷へ転げ落ちてしまったのでした。

どれほどだったのでしょうか。冷たい風に目を覚ますと、辺り一面には甘い酒の香り。見れば、岩と岩の間から黄金を溶かしたような水が「こんこん」と湧き出しているではありませんか。

息子はその水を両手ですくうと「一気に飲み干しました。」「酒だーやっぱり酒だ!!この酒を持ち帰って親父に飲ませてやろう。」「息子は腰に下げた瓢箪に酒を満たすと、大急ぎで山を駆けあがりました。もろろん、父親は大喜び。それから、瓢箪が空になると、その泉に出かけて酒を汲む

日々でした。すると不思議なことに、弱っていた父親は元氣を取り戻し、真つ白だった髪までが黒々としはじめたのでした。美濃の国に不老不死の泉が湧くといううわさはたちまち都まで伝わり、帝みずからその泉を訪れることになりました。

若返りの泉は、都人にも効能を發揮したのでしよう。帝は老いを養つ泉にあやかっつて、年号を「養老」と改めました。養老元年・西暦七一七年。また、奈良の大仏さまも生まれていない、むかしむかしの物語です。

白砂のよつにかくわしき飛沫をあげる伝説の滝は、巨匠老樹の生い茂る養老公園の北端開花の時を待つ桜の森の中で、今もなお、甘美な香りを漂わしています。

新しい世界に出会う養老天命反転地

養老の滝が奈良の世の伝説の地なら、養老天命反転地は平成の世の伝説の始まりです。今までに予想もつかなかった風景やいろいろな出来事に出会う場でもあり、自然とは異なった経験が生まれる地でもあります。



極限で似るものの家 経年累年の形をしたこの大きな建物の中を自由に歩き回ってみよう。反転してこの家の中で、いつもと違う自分を発見できるよ。



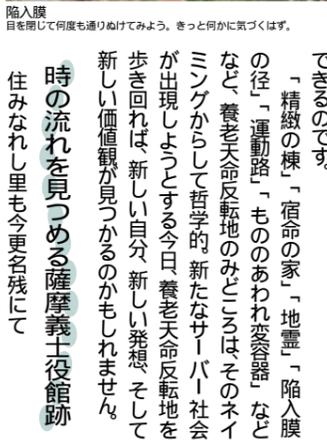
宿命の家 廢墟のようなこの場所をさまよってみよう。気がつけば、きみは異星人。



多目的ホール（記念館） 迷路のように突き出した様々な高さの壁に壁掛けたり、もたれたりしながらハイビジョン映像を観賞できます。

気ままにJOURNEY

屋根が特徴の建物の内部は、やはり迷路のようになっている。どこからでも出入りができるというも。茶色に塗られた天井に目を向ければ、一階部分をそのまま反転した世界が広がっています。ある場所にあるべきものはなく、思いもかけぬ場所に出現する何か。天と地がまさに倒錯した世界にたたくさめば、三半規管は思わずケケリ。完全に平衡感覚は失われ、これまで当たり前のよつに感じている固定概念や日常は、パツパツと打ち砕かれて



陥入膜 目を閉じて何度も通りぬけてみよう。きっと何かに気づくはず。



地霊 暗がりのこの部屋では、手さぐりしながら進まなきゃいけないよ。バランスをよく考えて歩いてみよう。

しまっています。これこそ、荒川修作の意匠。バランスが失われた身体がヨチヨチ歩きの赤ちゃんのような状態に陥ることを感じると意識。その意識を知ること、今まで知らなかった自分と出会うことができるのです。「精緻の棟」「宿命の家」「地霊」「陥入膜」の径「運動路」「ものあわれ変容器」など、養老天命反転地のみどころはそのネーミングからして哲学的、新たなサーバー社会が出現しようとする今日、養老天命反転地を歩き回れば新しい自分新しい発想、そして新しい価値観が見つかるのかもしれない。

時の流れを見つめる薩摩義士役館跡

立ちそわつらぶ美濃の大牧。これは、薩摩藩家老・平田勅負の辞世の句。今から約三〇〇年前、遠い薩摩の国を離れ、この美濃の地で宝暦治水を指揮した奉行です。薩摩といえは、気候も温暖な南の国。まして木曾川のような大河はなく、彼らがはじめて木曾川を眼前にした時、「まるで海のように」と驚いたのも無理のない話です。そんな薩摩藩士が遠い異国で治水工事を行うのですから、その苦労は並大抵なものではありません。刀をもつ手を鎌に変え、来る日も来る日も水と闘ったのでした。その平田勅負の本小屋が置かれたのが、養老町大牧の庄屋鬼頭兵内宅。ここを根城に平田勅負は資金や資材の調達に奔走したのです。

江戸幕府が七十七万石の薩摩藩に御手伝普請を命じたのは、その強大な勢力と財力の弱体化を狙ったもの。外様藩の雄、薩摩藩は、関ヶ原の合戦以来の目ざわりな存在だったのです。平田勅負は藩の金を使つての大規模工事の指揮官に任命されたのですから、その心労は押し知るべし。工事がすべて終わった宝暦



平田勅負翁像

打たれ強く、辛抱強い薩摩人気質。こうした勅負の意志と生涯は、大久保利通や西郷隆盛らに、受け継がれていったのでしよう。大政奉還を成し遂げた反骨の薩摩藩士は、明治という開明の時期を迎え、一躍、歴史の舞台に躍り出たのでした。

高田祭・愛宕神社春の例祭

- 5月16日(土)・17日(日) -



養老町を代表する春のお祭り。当日は、東町の林和靖軸、下川原町の神楽獅子軸、西町の狸々軸の三軸が、歴史絵巻さながらに高田商店街を巡行します。中でも必見は舞い踊るからくり人形。そのあでやかで華麗な仕草に、思わず感嘆のため息がこぼれます。

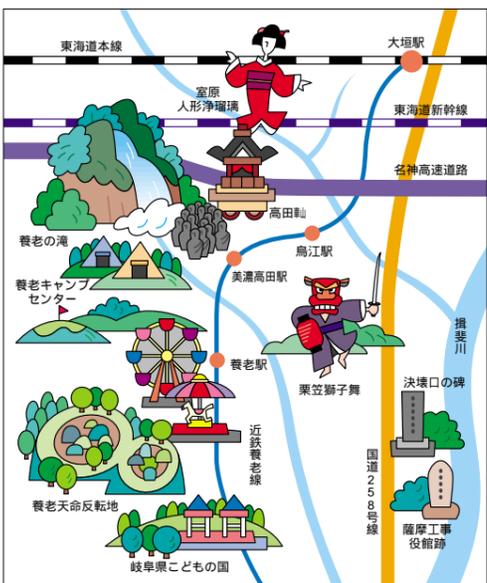
養老公園花と緑のまつり

- 3月21日(土) - 5月31日(日) -

養老公園は総面積78.6haの都市公園です。公園内には、養老の滝や名水百選に指定された菊水泉をはじめ、由緒ある神社・仏閣、史跡などがあります。また、養老天命反転地や子どもの国やキャンプセンター、バ・クゴルフ場などの施設も点在。養老公園の花と緑のまつりは3月21日から、4月初旬には、滝谷沿いに植えられたソメイヨシノが咲き競い、多くの観光客でにぎわいます。

養老町行事

- 養老公園花と緑のまつり.....3月21日(土) - 5月31日(日)
- 薩摩義士春の顕彰祭(大巻の役館跡).....4月10日(金)
- 高田祭り・愛宕神社春の例祭.....5月16日(土)・17日(日)
- 養老の滝開き式(養老の滝前広場).....7月1日(水)
- 養老公園納涼まつり.....7月1日(水) - 8月31日(月)
- 薩摩義士慰霊法要(根古地の浄土三昧).....8月13日(木)
- 佐竹直太郎翁顕彰祭(牧田川の高田橋西詰めの顕彰碑前).....9月1日(火)
- 全国スポーツ祭・バウンドテニス大会(養老町総合体育館).....10月3日(土) - 5日(月)
- 秋の養老園遊会(養老公園).....10月下旬
- 美術展/菊花展・合唱祭・草履展・吹奏楽祭等同時開催(養老町会館・公民会館).....10月下旬 - 11月上旬
- 98産業ふれあいフェア(養老町中央公園など).....11月上旬



- 公共交通機関利用
- 新幹線岐阜羽島駅から.....25分
 - 近鉄大垣駅から.....25分
 - 桑名駅から.....45分
 - (養老駅下車徒歩15分)
 - 名神大垣I.C.から.....20分
 - 関ヶ原I.C.から.....20分
 - 東名阪桑名東I.C.から...50分

特集 伊勢湾台風 第二編

被災者二〇万人 深い傷跡を残した伊勢湾台風の被害

昭和三十四年九月二六日 超大型台風に成長した伊勢湾台風は、伊勢湾一帯に悪夢をもたらしました。高潮に呑み込まれる家屋、洪水に押し流されるおびただしい流木...

最悪の台風コース、風と気圧 昭和三十四年九月二六日、潮岬の西方から紀伊半島に上陸した伊勢湾台風の最大風速は五〇m/s、風速二五m/s以上の暴風半径は三五〇kmで...



堤防もろとも崩れ落ちる家屋 (伊勢湾台風30年記念誌写真提供)

上陸後も台風の勢力は衰えることなく、奈良・三重県の県境を平均六五km/hのスピードで進み、一九時過ぎには桑名市付近に到着...



根こそぎ破壊された海岸堤 (伊勢湾台風30年記念誌写真提供)

堤防を呑み込んだ記録的な洪水波 台風が接近した二五日には本邦の大部分に前線による降雨があり、特に同日夕刻から二六日未明にかけて、揖斐川上流部、長良川上流部で時間雨量二〇〜四〇mmの強い雨が降りました。



墓地も海の底 (伊勢湾台風30年記念誌写真提供)

台風による降雨は、特に大きいというほどではありませんでしたが、短時間に集中して降ったために、木曾三川に大きな洪水をもたらしました。

揖斐川流域では全川にわたり、既往最高水位を上回り、直轄区域では計画高水位がそれを越える大出水に見舞われ、各地の堤防が危険な状態となりました。



延々と続く流失家屋の残骸 (伊勢湾台風30年記念誌写真提供)

数日に及ぶ湛水被害 防潮堤防及び河川堤防の二四〇箇所にわたる決壊は、三万ha以上の広大な地域に湛水被害をもたらした。遠くは海岸から一五km以上離れたところまで、海水は侵入しています。

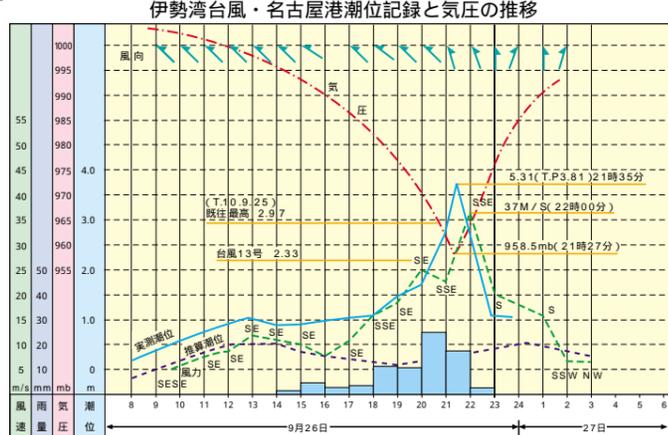


水没でマヒ状態に入った名古屋市南区 (伊勢湾台風30年記念誌写真提供)

景色を変えた暴風の威力 伊勢湾台風の風の熾烈さは、台風が伊勢湾の西を通ったことによるもの。最大瞬間風速は愛知・三重両県の大部分と岐阜県の南部平野では四〇m/s以上...

Table with 5 columns: 県市郡別 (Prefecture/City/Town/Village), 死者 (Deaths), 行方不明 (Missing), 負傷者 (Injured), 住宅被害 (Residential Damage). Rows include Aichi Prefecture (名古屋, 津島, 海部, 知多, 常滑, 半田), Mie Prefecture (桑名, 三重, 四日市, 鈴鹿), and a Total row.

た津島市まで、海水は侵入しています。このように、浸水被害が広範囲にわたったのは、大小の河川及びその支川や運河が内陸部にまで通じていたため、各河川が逆流する浸水経路になったものと考えられます。



伊勢湾台風・名古屋港潮位記録と気圧の推移

干拓地は再び元の泥海に そもそも名古屋市南部と海部郡南部一帯は海抜〇m〜〇.五mの低湿地で、約三百年前までは海底でした。江戸時代の初期から活発に新田開発が行われ、遠浅の海を利用した海岸地帯の干拓が次々と行われました。



木曾川堤の破壊状況 (伊勢湾台風30年記念誌写真提供)

Table showing the amount of damage (被害額) in thousands of yen. Columns include: 土木 (Civil Engineering), 農地 (Farmland), 農林水産 (Agriculture/Forestry/Fishing), 商工 (Commerce/Industry), 住宅 (Residential), その他 (Other), and 合計 (Total).

- 参考文献: 『木曾三川高潮対策事業/高潮堤防緊急高上工事誌』、『建設省木曾川下流工事事務所発行』、『輪中と高潮/伊勢湾台風の記録』、『伊藤重信編著/三重郷土資料刊行会刊』、『伊勢湾台風30年』、『伊勢湾台風復旧工事誌』、『建設省中部地方建設局』、『伊勢湾台風災害誌』、『建設省』

警戒の最前線



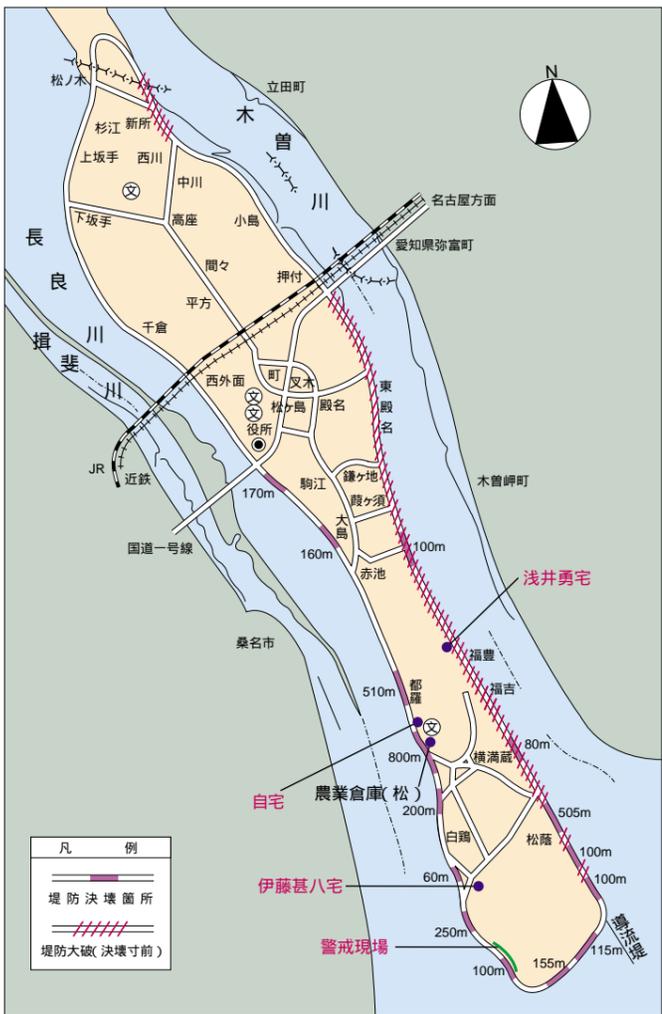
長島町町長 伊藤 仙七
 プロフィール
 大正12年9月14日生
 零戦パイロットとして終戦を迎え、昭和21年7月伊曾島村役場に就職。昭和31年町村合併により長島町役場総務課消防係として伊勢湾台風を体験。
 昭和51年助役に、昭和54年4月に町長に初当選、連続5期当選、現在に至る。

伊勢湾台風体験

昭和三四年九月二六日來襲の伊勢湾台風は古今未曾有の強大な勢力で猛威を振るい、五千名に及ぶ生命と莫大な財産を一瞬の内に、凄じ勢いで堤防が決壊すると同時に怒涛の如く押し寄せた濁流に呑み込んで行った。当日の夜の最も凄まじい光景がやがて四〇周年を迎えようとしている今も尚あの忌まわしい思い出を鮮明に憶えている。

本町における犠牲者も三八三名と数名の行方不明者があり、且つ家屋の全壊、倒壊、流失とおびただしい災害を蒙った。私もこの災害によって妻と二男の二人をなくした遺族

伊勢湾台風被害状況図 長島町略図



でもある。台風の経路と時刻、進路等についての詳細は幾度となく記録発表されていることでもあり省略致します。

当日は、暴風警報が発令されると対策本部が設けられ、役場総務課長他幹部職員ならび担当職員と消防団長、副団長、機動分団長等は役場に出動待機となり消防団員は各分団長の指示に従い、分団責任区域の堤防警戒に当たりました。

私は伊曾島地区において水防活動する消防団水防活動に従事する水防団の要請する水防資材の確保と資材を現地に送り届ける事が任務でありました。

警戒現場地域から伝達される各分団の情報本部に報告することと消防団に対する対策本部からの水防活動を指示連絡することが、私に課せられた任務でした。

台風の上陸がラジオ、ニュースで知られる頃には暴風雨は益々強くなり、南西方向からたたきつけるように吹きつける波浪は松蔭西下揖斐川堤防を時折飛び越えていく勢い。

その頃、現場から水防用カマスと縄の補給要請があつて、普通なら〇〇分で行ける道のりを強風で吹き飛ばされた「海苔粗末(猛吹竹)五、六本を束ねたもの」が道路上にころころ。資材運搬中のオート三輪一台と小型トラックのトヨエースの三台で障害物を取り除きながら現地向かったが、ようやくトラックのみ到着。二台のオート三輪車はエンジントラブルで停車のままとなった。これまでに一時間二〇分の時間を要した。

早速、現場に資材を送り届けたが、現地では既に堤防の半分近くが削り取られ、土砂を



揖斐川左岸白鷲附近

流の中を流されている間は何としても生きなればと一生懸命そののみを考えていた。自分一人さえままため現状に残された家族はどうなつたであろうか。ただ無事であつてほしいと祈るのみである。助け上げられた家は東福豊の浅井勇さんの家だつた。隣部落の顔見知りの人であり、出動以来の説明をした。台風も過ぎ去り静かになつた窓辺には月の明るさが差し込み、窓を開けて遙か南の方は家並みが見え、流れては月明かりに遠く四日市市の方が見えるではないか、あゝ自分の家は流れたのか。家族は胸の動悸が高鳴るのを覚えた。空を見上げる。月が煌煌と輝き、辺りの水面はきらきらと何事も無かつたよな静けさだつた。

一夜明けてあたりは倒壊流失した家屋の流木や木製家具等吹き溜まりで一杯だつた。流木を足場に渡して残された堤防に登ると堤防はあと二程の幅を残して打ちつける波に下まで洗い流されていた。残された家はどの家も瓦は飛び大きく傾きまともな家は無く大きな被害を受けていた。堤防の切れかけた処は破壊家屋の流材木が一杯流れていて、心焦る儘に家路に急ぐ途中、長兄の自宅前を通りかかると私を呼び止めて、私の自宅の方まで変わらなかつたかと思つた。私と私の妻と次男が方方知れずのよつた話した。私はかたくりとしたが、気が取り直して何かにつかりながら流れて何処かで助かっているのではと思つた。

詰めたカマスの土俵も投げ入れた瞬間波に持ち去られる始末に堤防の決壊も時間の問題と判断し、水防団員に即刻水防活動を中止し、各自の家族に高台へ避難させるため付近の人たちにも避難するよう怒鳴りながら伊藤甚八方詰所に引き揚げる。

家の中に入ると近所の人や消防団員で一杯だつたこの付近では唯一の同電があつた。早速、堤防決壊も時間の問題と電話で本部に現地の状況を報告、緊急避難の早鐘を打つよう連絡したが、台風による障害が電話の応答もと切れと切れで要領を得ないが、何、堤防がされる。そんな馬鹿な」と半信半疑のようだ。その内電話線も切れたのか連絡不通となつた。停電で真っ暗の中であつた懐中電灯を頼りに伊曾島支所まで引き返す決意をした。お、い支所まで帰るぞ」と大声で叫ぶと消防団員の運転する小型トラックに十人程乗り、乗れない団員や上流の高台へ避難しようとする一般住民はトラックに捕まりながら小走りに走る。

白鷲の堤防から青鷲の堤防に移った時異常な有様に驚いた。台風による高潮は既に堤防を超え、堤防上を「うごうご」と内側へ流れ落ち、堤防の内側五〇・六〇mの路肩は崩れ始めていた。波と台風が吹き飛ばされないうちにやつこの思いで当時の伊曾島駐在所近くの農業倉庫付近にたどり着いた時、堤防上には立つていたサンドポンプ船の送電用電柱が倒れて自動車の手を遮断した。四五人で起こすとしたが、びくとも動かない。そこを這う内に堤防の高潮は膝上まで浸かり、高波が来る。堤防下へ押し流される状態になる。子供は大人の腰紐につかまりながら、そばにあつた農業倉庫や民家に助けを求めて逃げ込んだ。

れ込み這い上がる事が出来ない。水の少ない方へ近づくと松の木にトタン屋根が引きかかり、そこからは堤防から流れ落ちる水も少なくとさの思いつきで

「そつた松の木に登つて此の場を逃れよう」とトタン屋根を踏み台に松の木を登り始めた。

ある程度登ると人の足に触れたので、誰かと声をかけると「馬戸場だ」と答える。最上部には森良一君が登つていた。先程のトラックで一緒に引き揚げた消防団員達である。「えらい事になつたなあ」と言いながら消防団員等は各自携帯の命綱を持っていたから風に吹き飛ばされないように体を松の木に縛つた。

しばらく様子を見てみると台風は益々激しくなり、やがて不気味な地響きと同時に堤防が動いたような感じがした瞬間、怒涛の如く一気に崩れ込む堤防と海水が目の前の農業倉庫も一緒に巨大なブルドーザーで押し倒すようにひっくり返つて行った。何としたか、あの倉庫の中に避難した人もあつたであつた。心の中で念仏を唱えた。不思議と時折種妻のような光がびかびかと光り、暗闇の中でも流れ込む海水の勢いがはつきり分かるような気がした。



倒壊寸前の民家(殿名地区)

が異様なくらいカチカチと耳に響いた。一生懸命もがきながら息苦しく海水も呑み込んで、やつと浮かび上がった。何かつかまるものは無いかとふと手に触れたのはこわれた家の外張り固い板のようだつた。体をそつと乗せても沈むことは無かつた。間もなく消防団員の馬戸場君も森君も浮かび上がつてきた。一組の若い夫婦も加わつて五人が輪になつて勢いよく流されて行く。突然坂落しになつたように、またもや水中にはあり込まれたといつか、低い処へ落ち込んだようだつた。再び浮かび上がった時は、五人ははらはらに散つていた。水の流がれがどうなつて居るのか、大きな声で「おーい」と怒鳴つた。かすかに「おーい」と返答があつた気がしたが、再び人にめぐり逢ふ事もなく、大きな角材に挟まり何処ともなく流れる。雨合羽を着て「コム長靴だつたので泳ぎに不都合と長靴は脱ぎ捨てた。どれだけの時間が過ぎたのか。随分長い時間、水の流れるまま台風の強い風に吹きさらされながら流れている。電柱が倒れ電線に引っ掛かつたようだつた。猛宗竹の竹敷の上を通り過ぎ、あゝ堤防内だなど気が付いた。やがて薄ぼんやりと灯りのついた家が流れて行くように見えた。考えてみれば、こちらが流れていることに気が付き、だんだんと近づくと灯りのある方向に吹き寄せられていたようだつた。壊れた家の材木がいつか次から次へと吹き寄せられている。

灯りの浅れる家に辿り着くと飛び出した釘に気を付けながら軒下に回る。窓とおぼしき辺りをコンコンとたたくと中から窓を開けて、ずぶ濡れの私を天井裏の部屋に助け入れてもらった。濁

TALK & TALK

堤防の崩れてくるのが自分の足の元付近づく、「ロープを解け」このまま松の木が倒れると駐在所の屋根に落ちるからその体勢で構えた。松の木が傾き倒れ始めた。「一、二、三、それ」と二人一緒に屋根に飛び降りたが、その家も一緒に屋根からひっくり返つて行った。

三人共濁流の中に吸い込まれて行く。水の中は何も見えずあちこちで石のぶち当たる音

が異様なくらいカチカチと耳に響いた。一生懸命もがきながら息苦しく海水も呑み込んで、やつと浮かび上がった。何かつかまるものは無いかとふと手に触れたのはこわれた家の外張り固い板のようだつた。体をそつと乗せても沈むことは無かつた。間もなく消防団員の馬戸場君も森君も浮かび上がつてきた。一組の若い夫婦も加わつて五人が輪になつて勢いよく流されて行く。突然坂落しになつたように、またもや水中にはあり込まれたといつか、低い処へ落ち込んだようだつた。再び浮かび上がった時は、五人ははらはらに散つていた。水の流がれがどうなつて居るのか、大きな声で「おーい」と怒鳴つた。かすかに「おーい」と返答があつた気がしたが、再び人にめぐり逢ふ事もなく、大きな角材に挟まり何処ともなく流れる。雨合羽を着て「コム長靴だつたので泳ぎに不都合と長靴は脱ぎ捨てた。どれだけの時間が過ぎたのか。随分長い時間、水の流れるまま台風の強い風に吹きさらされながら流れている。電柱が倒れ電線に引っ掛かつたようだつた。猛宗竹の竹敷の上を通り過ぎ、あゝ堤防内だなど気が付いた。やがて薄ぼんやりと灯りのついた家が流れて行くように見えた。考えてみれば、こちらが流れていることに気が付き、だんだんと近づくと灯りのある方向に吹き寄せられていたようだつた。壊れた家の材木がいつか次から次へと吹き寄せられている。

灯りの浅れる家に辿り着くと飛び出した釘に気を付けながら軒下に回る。窓とおぼしき辺りをコンコンとたたくと中から窓を開けて、ずぶ濡れの私を天井裏の部屋に助け入れてもらった。濁



木曾川堀深いを望む50戸余全部流失の跡(松東地区)

流の中を流されている間は何としても生きなればと一生懸命そののみを考えていた。自分一人さえままため現状に残された家族はどうなつたであろうか。ただ無事であつてほしいと祈るのみである。助け上げられた家は東福豊の浅井勇さんの家だつた。隣部落の顔見知りの人であり、出動以来の説明をした。台風も過ぎ去り静かになつた窓辺には月の明るさが差し込み、窓を開けて遙か南の方は家並みが見え、流れては月明かりに遠く四日市市の方が見えるではないか、あゝ自分の家は流れたのか。家族は胸の動悸が高鳴るのを覚えた。空を見上げる。月が煌煌と輝き、辺りの水面はきらきらと何事も無かつたよな静けさだつた。

一夜明けてあたりは倒壊流失した家屋の流木や木製家具等吹き溜まりで一杯だつた。流木を足場に渡して残された堤防に登ると堤防はあと二程の幅を残して打ちつける波に下まで洗い流されていた。残された家はどの家も瓦は飛び大きく傾きまともな家は無く大きな被害を受けていた。堤防の切れかけた処は破壊家屋の流材木が一杯流れていて、心焦る儘に家路に急ぐ途中、長兄の自宅前を通りかかると私を呼び止めて、私の自宅の方まで変わらなかつたかと思つた。私と私の妻と次男が方方知れずのよつた話した。私はかたくりとしたが、気が取り直して何かにつかりながら流れて何処かで助かっているのではと思つた。

何はさておき食料の確保をせねばならぬ。鍋釜、食器類をかき集めたり、近所隣で食べ物をかき集めて当座は済んだ。そのうち近郷近在の町や親戚知人から白米等が届けられ、塩おにぎりが食べられるようになった。

一日目の午後に入ると漁船を動員して遺体の回収が始まった。誰彼となく大人は交替でその仕事から始まった。台風後は天気も快晴で温度も高く次々と死体が浮かび運び込まれて来る。検死の警官が三人程派遣され、私と支所の職員は遺族の確認を取りながら検死の済んだ調書作成のため多忙を極めた。

九月十七日自衛隊に出動命令が発令され被災地に派遣されると、遺体の回収や道路上の障害物の除去、飲料水の確保、伝染病発生予防の消毒開始、老弱男女や小児児童の避難所収容が開始され当初鈴鹿電通学園へ海と空から避難した。引き続き高田本山へ避難する者もあつた。又、小・中学校の学童が桑名市川口港より自衛艦に乗艦して伊勢市へ集団避難。〇月四日には伊曾島小学校の学童は鈴鹿電通学園より津市水産大学に移転避難した。

全国から送られる救援物資の配分や配送に自治会の方々は多くの協力を得た。堤防の仮し切り工事が始まると住民は進んで昼となく夜となぐ人夫に参加し、堤防の基礎作りに必要な粗梁造りや石運びに精励し一生懸命働いてくれた。

実に地域の住民が災害復旧に協力貢献したことを感謝申し上げるとともに心から敬意



災害復旧工事には、婦人の姿も見られ総動員で行なわれた。中日日本新聞社提供

民話の小箱

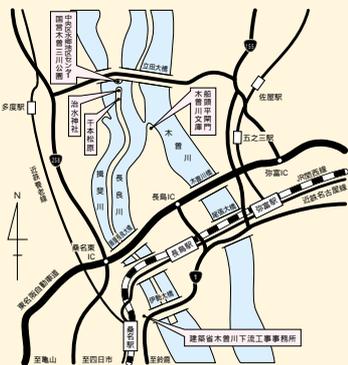
釜段のさいかちさん

養老町の南端にある釜段輪中は、釜段と駒野新田の二村からなる輪中です。輪中の開発は江戸初期の明暦四年（一六五八）のこと。尾張藩士藤田大学の子、藤田十人（別名、半斎）が高須藩に願い出て、開発は始められたのでした。しかし、釜段は津屋川と揖斐川の合流点に近く、この地方でも最も低いところ。池や沼も多いことから、工事は難儀をきわめました。中でも、津屋川堤防の一角所は、幾度堤防を築いても洪水に流されてしまつた始末。これでは、多額の費用と人々の労苦をかけた工事も、水の泡になりかねません。困つた人々は、村の古老に相談したところ、「この場所は、昔から白竜さまが住む神聖な場所じゃ。堤防の工事が失敗ばかりするのは、白竜さまのたたりにながらない。工事をすみやかに進めたくば、神仏のご加護にすぎるほかはあるまい」と、話してくれました。そこで人々は、この地が生んだ刀匠、志津三郎の名刀と立派な堤防が完成し、大雨で川が暴れても、洪水は堤防を越えることはありませんでした。「これも神仏のご加護にすぎない。ありがたうござん。白竜さまの祠をたてて、霊を祀らなければ、きつと罰があたるぞ」と、輪中の完成を喜んだ人々は、堤防の付近に、「白竜神社」を建てて、白竜さまの霊をなぐさめました。また、この堤防の場所には、さいかちの木と大きな松の木がありましたので、人々はいつからとなくこの地を「さいかちさん」と呼ぶようになった。

かつての釜段輪中の水田のほとんどは、掘上田。農作業は舟を使って行われ、農家一軒に三、四艘の舟をもっていました。しかし、今日では土地改良の結果、一面の美田となりました。



木曽川文庫利用案内



- 《開館時間》午前9時～午後4時30分
- 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》無料
- 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平開門管理所・
木曽川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

当館がある船頭平開門河川公園では「桜まつり」（3月29日～4月5日）が、近隣の木曽三川公園センターでは、「チューリップ祭」が4月7日～4月19日の13日間にわたり開催されます。

この春、当館では木曽川文庫ホームページを開設しました。KISSOの内容ははじめ周辺ガイドなどを掲載しています。

また、所蔵図書の検索システムの充実につとめます。

木曽川文庫ホームページ（4月開設）
<http://www.kisogawa-bunko.cb.moc.go.jp>

表紙写真
上右:牧田川堤決壊口の碑
下左:養老の滝 下右:養老公園